

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：34524

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K12143

研究課題名(和文) 終末期患者の意思表示を支えるための高齢者市民を対象としたエンドオブライフケア教育

研究課題名(英文) Enlightenment Education on End-of-Life Care to Support Decision Making for Senior Citizens

研究代表者

小笠原 知枝 (Ogasawara, Chie)

兵庫大学・看護学研究科・教授

研究者番号：90152363

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、終末期高齢者の意思表示を阻害する要因を明らかにし、その結果を反映した意思決定を支援するための教育プログラムを開発した。さらに、これを用いて、高齢者市民を対象とした研修会を開催した。

主な成果として、終末期をその人らしく生ききるためには、主体的な意思表示が不可欠であり、最終段階を迎える前から、終末期ケアに関する知識を習得し、高齢者自身がセルフケア遂行を自覚することの重要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

患者が医療やケアに主体的に参加するには、患者の意思表示が重要な鍵となる。そこで、本研究では意思表示を阻害する要因を反映させた教育プログラムの開発し、高齢者市民を対象とした研修会を開催した。

これによる学術的意義は、実態調査や文献レビューにより示唆された意思表示の阻害要因を根拠として教育プログラムの開発に反映したことであり、さらにその有用性を検証していることにある。

社会的意義としては、人生の最終段階をその人らしく生ききるために、終末期ケアにおける意思表示が重要であること、セルフケア遂行の必要性を自覚することが示唆されたいことに対して、研修会への参加が効果的であると示唆されたことである。

研究成果の概要(英文)： This study clarified the barriers to decision-making of the terminally ill elderly and created an educational program to support decision-making reflecting the results. In addition, the workshops were held for elderly citizens. The main results suggest that expression of intention is essential for living the end of life as a person, and that it is important for the elderly to acquire knowledge about end-of-life care and to be aware of the performance of self-care themselves even before reaching the final stage.

研究分野： エンドオブライフケア看護学

キーワード： 高齢者市民を対象とした啓発教育 最終段階を生ききるための意思表示 エンドオブライフケア教育プログラム

1．研究開始当初の背景（本研究課題申請時における背景・動機について、簡潔に記入）

医療者中心の積極的治療が優先される病院において、どれだけの患者が、受けたい医療を自分で決め、望んだ場所で、死にゆくプロセスが重視された終末期を過ごしているだろうか。医療機関で過ごす多くの終末期患者は在宅死を願いつつも、その8割が病院や診療所で死を迎えており、在宅での死亡率はわずかに12%に過ぎないと報告されている（厚生労働省，2010）。こうした現状の背景には、次の2つの問題があると考えられる。

その1つに医療職の消極的態度である。終末期医療や余命告知において、患者本人よりも家族の意向が優先されている。厚生省（2014）による終末期医療に関する意識調査においても、被験者の半数が終末期医療について家族と話し合っていないと報告されている。最近では早期から事前指示書を作成しACP（アドバンスケアプランニング）が実施されつつある。しかしながら、臨死期にその事前指示書は活かされず、余命告知後の患者の心理面へのフォローは不十分であるのが実態である。こうした余命告知のあり方や医療職者の態度が、余命認識のずれを生じさせ、患者の主体的な意思表示を阻む要因になり、患者にとって不本意な終末を迎えさせていると推測される。

もう1つは人々の終末期に対する認識不足である。これまでの終末期医療は「がん」に特化して一般病院で実施されてきた。しかし、病院のがん患者だけがエンドオブライフケア（以後EOLCと略す）の対象ではなく、さまざまな疾患や症状・苦痛をもちながら終末期を迎える人々も対象であるという認識不足があり、これに対する教育的対策が課題になっている。また、終末期はあらゆる年齢層を含み、病院だけでなく、在宅、老人ホーム、ホスピスなどでのさまざまな場で終焉を迎えているしかもさまざまな疾患により終末期の期間や病態も異なる。人々のこうした認識不足や理解不足に対して、具体的な教育的支援が必要であると考えられる。

本研究においては、医療職者だけでなく、一般市民を対象に、終焉を迎えるさまざまな場面を想定して、終末期患者のQOL・QODDを重視したEOLC教育を構想している。特に、多くの患者が在宅死を希望している現状を考えると、厚労省（2014）が指摘したように、本人の希望を尊重した仕組みや環境を整備するためには、地域における患者とその家族の生活に焦点を合わせたEOLC体制の確立を目標に、医療職者と高齢者市民が合同した場で、EOLC教育の実施が必要不可欠であると考えられる。

2．研究の目的

本研究では、先ず、終末期患者の意思表示を阻害する要因を、エキスパートナースの面接調査や文献レビューなどにより明らかにする。次に、特定された意思表示阻害要因が終末期患者の病気や生活にどのように影響を与えているかという観点から、医療職者や高齢者市民を対象としたエンドオブライフケア教育プログラムを開発する。そして、この教育プログラムに基づく教育介入を、高齢者市民と医療職者合同の研修会で実施することにより、QOL・QODDを重視したエンドオブライフケアに対する高齢者の認識を高めることを目的としている。

3．研究の方法

上記の目的のために、以下のような5段階を踏んでアプローチする。

第1段階：終末期患者の意思表示阻害場面の実態把握と意思表示阻害要因の明確化

末期の予告告知前後の状況と、在宅移行が困難な状況を設定して、エキスパートナースに面接調査を実施し、得られたデータの内容分析により、上記2状況における終末期患者の意思表示阻害場面の実態把握と意思表示阻害要因を抽出する。

第2段階：EOLC教育プログラムを開発：プログラムの内容と教育介入プロセスの検討

(1)教育プログラム内容の検討

第1研究の結果をもとに、以下のような教育内容を検討する。 終末期患者・家族の意思表示場面の

実態とその阻害因子、 終末期における病気と生活行動の軌跡、 医療に関連したバリア因子、緩和ケア、エンドオブライフケア、ホスピスケア、グリーフケア、 Total PainとQOL & QODDの軌跡

(2)教育介入方法の検討：知識・技術・態度などの3領域などに分類し、講義・グループワーク討議・ロールプレイなどの教育介入方法について検討

第3段階：EOLC教育プログラムの効果を測定するために評価指標の作成

研究1で明らかにされたエンドオブライフケアに関する知識・態度（考え方）から教育プログラムの効果を測定するための評価指標を作成する

第4段階：開発されたEOLC教育プログラムを用いて研修会を実施

高齢者市民のエンドオブライフケアに対する認識と態度の変容に求め、65歳以上の高齢者市民を対象に、研究2で開発されたEOLC教育プログラムを用い教育介入を、研修会を開催して実施する。

第5段階：開発されたEOLC教育プログラムの効果と教育介入プロセスの評価

教育プログラムの効果を第4段階で実施された教育介入前後で評価指標を用いて比較し検証する。また教育介入プロセスの評価は、教育環境やエンドオブライフケアに関与する要因との関連で分析を行う。

4. 研究の成果

(1)高齢者市民を対象とした啓発教育プログラムの開発

内容は、第1段階の実態調査と文献レビューにより、下記のようなエンドオブライフ期のQOL & QODDの阻害因子を明らかにした結果、講義内容と演習内容を厳選することができた。冊子の内容は講義と演習から構成した。

講義は、エンドオブライフ（EOL）の特徴、医療やケアの現状、エンドオブライフケア、地域包括ケアシステム、認知症高齢者施策、在宅ケア、医療における意思決定、意思表示の手段、事前指示書やACP、意思表示を阻むもの、人生の最期をその人らしくいききるために、などの4部から構成した。A4版のスライド資料を配布し、スライドによるプレゼンを実施した。

演習では、「事例：慢性閉塞性呼吸器疾患の患者が急変し、人工呼吸器を装着するかどうか」を考えてみよう、エンディングノートを書いてみよう、というテーマでグループワークとした。1グループは5～6名で構成。

(2) エンドオブライフケアに関する知識・態度評価尺度の作成

主な目的は教育プログラムの効果を測定することであるが、研修会に対する意見や感想も含めた。質問項目は研修会で用いるために簡単明瞭であることを留意とした。質問紙は、エンドオブライフケアに関する知識5項目と態度5項目、研修会の評価7項目、プロフィール項目5項目から構成した。

(3)開発した教育プログラムを用いた研修会の実施

教育プログラムの効果を検証するために、教育介入前後に、上記(2)で作成したエンドオブライフケアに関する知識・態度評価尺度を用いて調査を実施し、以下のような結果を得た。

分析対象者のプロフィールの概略

3か所で研修会に参加した70名の内、分析対象者は66名であった。年齢は65歳以下が22名(33%)、66歳～70歳は10名(15%)、71歳以上は31名(47%)、無回答3名(4%)であった。性別では、男性14名(21%)、女性49名(74%)、無回答3名(5%)であった。

エンドオブライフケアに関する知識習得の向上と主体的な考え方への変化

エンドオブライフケアに関する知識得点(5点満点)は、研修前 2.50 から研修後 3.62 で有意差 ($p < .01$) が認められた。

またエンドオブライフケアに対する考え方はすべての項目が上昇した(図1参照)。特に「人生の最後をどこで迎える自分で考えておくべきである」の項目では、有意な差が認められた ($p < .05$)。

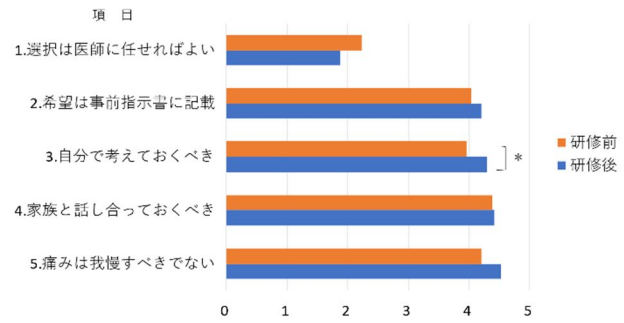


図1 EOLの考え方 n=66 * $p < .05$

研修会における講義と演習に対する評価(図2・図3・図4参照)

配布資料とスライドを用いた講義に対して、「かなり理解できた」27%、「理解できた」59%で87%が理解できており、その背景には、研修に対する関心が高かったことによる影響が推測される。

演習では、「とても満足している」41%、「満足している」55%で、演習参加での満足度は非常に高かった。配布資料とスライドによる提示かした事例「慢性閉塞性呼吸器疾患の患者が急変し、人工呼吸器を装着するかどうか」について、4事項(あなたがAさんの立場であれば、人工呼吸器装着についてどのように考えますか。あなたがAさんの妻の立場であれば、人工呼吸器装着についてどのように考えますか。

Aさんの妻のように代理意思決定をすることについてどう思いますか。最後まで自分らしく生ききるために、もしもの時のために今準備できることはどんなことであると思いますか)について、グループで検討した。非常に高満足を示した背景には、参加者にとって非常に関心が高い内容であったことと、グループワークに直接参加し、グループ内での意思表示が可能であったことと関連しているものと推測される。

エンディングノートの作成については、上記の講義や事例検討の演習に比較して、「とても適切である」18%、「適切である」56%で、74%と低かった背景には、エンディングノートの作成には時間不足だったことがあると考えられる。

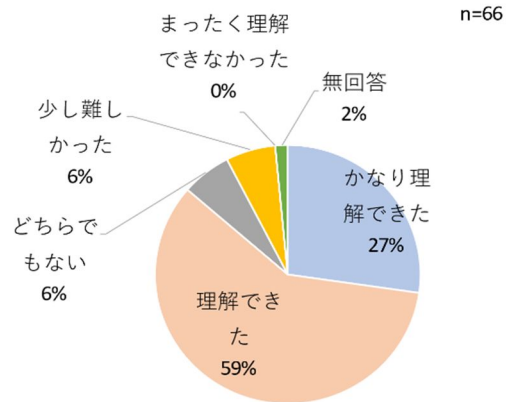


図2 講義の理解

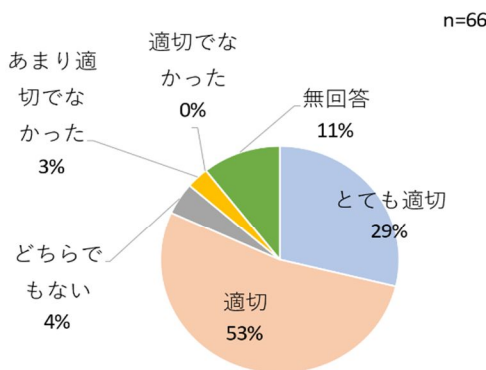


図3 事例検討

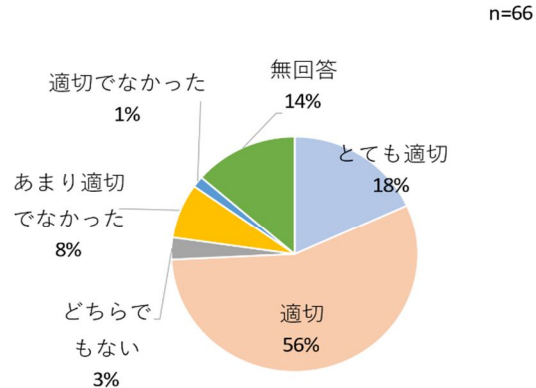


図4 エンディングノート

研修会の内容に対して、「とても満足している」41%、「満足している」53%であり、また研修会での学びは実際の生活に役立ちそうですかという質問にも、「かなり役立つ」36%、「役立つ」50%と評価は高かった。

以上から、研修会の開催はコロナ感染禍の影響で制限を余儀なくされ続け、分析対象者は66名であったが、高齢者市民を対象としたエンドオブライフケアに関する啓発教育の観点からの成果はあったものとする。

(5) 冊子「人生の最終段階を自分らしく生ききるための準備」の作成

冊子はA3サイズで70ページから成り、ノート形式のため、講義や演習に対する研修者の理解を容易にしている。今後、エンドオブライフケアに関するさまざまな啓発教育の資料として、有意義と考える。

今後は、作成した冊子（右記）を用い、一般高齢者だけでなくその家族を含めて研修会や老人ホームなどでも研修会を開催してゆきたいと考えている。

研修の目的として、最終段階における身体と心の変化の理解、最終段階の医療やケアの理解、自分自身の考え・意思を伝える必要性の理解を挙げた。

講義の内容は4部から構成した。講義Aでは エンドオブライフ（EOL）の特徴、EOLをどこで迎えるか、医療とケアの現状について、EOLのQOLとQODD、講義Bでは、エンドオブライフケア、地域包括ケアシステム、認知症高齢者施設：オレンジプランと新オレンジプラン、在宅ケアの現状、訪問看護ステーション、講義Cでは、医療における意思決定の3パターン、最終段階における医療の決定プロセス、意思表示の手段、事前指示書の問題点と対策、ACPに期待されること、意思表示を阻むもの、最後の講義Dにおいて、人生の最後をその人らしく生ききるためにというテーマで討議をしてまとめるなどを具体的な内容とした。



冊子の表紙

(6) 今回の研究成果に基づく高齢者のエンドオブライフケアの現状と課題に関する講演

日本地域共生ヘルスケア学会第一回学術集会において、シンポジウム「アジア諸国のグローバル・エイジングから考えるエンドオブライフケア」に、パネリストとして参加した。『我が国における高齢者のエンドオブライフケアの課題』のテーマで講演をし、参加国のタイ、マレーシア、インドにおける高齢者に対するエンドオブライフケアの現状について共有することに貢献した。

今後、高齢者市民を対象とした研修会を開催し、啓発教育を進めたい。また高齢者福祉施設の介護者らにも、開発した冊子を用いて教育介入を進めたいと考えている。本研究を得られた成果は関連学会で報告する計画である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 田島真智子, 小笠原知枝, 永山弘子	4. 巻 4(2)
2. 論文標題 高齢がん患者の退院困難要因の内容分析に基づく看護学生を対象とした退院教育介入プログラムの開発	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本ヒューマンヘルスケア学会誌	6. 最初と最後の頁 11-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 對中百合, 小笠原知枝, 新井祐恵, 加藤亜妃子	4. 巻 3
2. 論文標題 看護師が捉えたEnd of-Lifeにおける患者のQOL・QODDを高めるケア要素と阻害する要因	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本エンドオブライフケア学会誌	6. 最初と最後の頁 23-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 新井祐恵, 小笠原知枝, 對中百合, 加藤亜妃子	4. 巻 2
2. 論文標題 ICUにおけるエンドオブライフケアの構成要素の抽出と時期に応じた適切なケアの検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本エンドオブライフケア学会誌	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 林容子, 小笠原知枝, 加藤亜妃子, 朝倉由紀	4. 巻 1
2. 論文標題 終末期がん患者と家族の予告告知に基づく死の認識と患者の年齢との関連分析	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本エンドオブライフケア学会誌	6. 最初と最後の頁 11-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小笠原知枝
2. 発表標題 Current Status and Issues on End of Life Care for the Elderly in Japan
3. 学会等名 日本地域共生ヘルスケア学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山本純子, 小笠原知枝, 加藤亜姫子
2. 発表標題 臨死期の在宅高齢者とその家族における訪問看護師の意思確認へのケア支援
3. 学会等名 第3回日本エンドオブライフケア学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤亜姫子, 山本純子, 小笠原知枝
2. 発表標題 訪問看護における高齢者の在宅看取りに関する終末期ケアの特徴
3. 学会等名 第3回日本エンドオブライフケア学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 H. Nagayana, C. Ogasawara, K. Imura, and M. Tajima
2. 発表標題 Japanese Nurses' Perspective on Death and Dying on a Systematic Review and Conceptual Analysis
3. 学会等名 2019 AAPINA & TWNA Joint International Conference
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 對中百合、小笠原知枝、新井祐恵、加藤亜妃子、林容子、朝倉由紀
2. 発表標題 End-of-Life CareにおけるQOL・QODDを高める看護実践能力尺度の開発とその検証
3. 学会等名 日本エンドオブライフケア学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 新井祐恵、小笠原知枝、對中百合、加藤亜妃子、林容子、朝倉由紀
2. 発表標題 ICU終末期患者とその家族のQuality of Dying & Deathを支援する看護師のEnd-of-Life Careの実態
3. 学会等名 日本エンドオブライフケア学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林容子、小笠原知枝、加藤亜妃子、朝倉由紀、新井祐恵、對中百合、田島真智子
2. 発表標題 遺族からみた終末期がん患者のQODDと遺族の悲嘆回復の関連性
3. 学会等名 日本エンドオブライフケア学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoko Hayashi, Chie Ogasawara, Akiko Katou & Yuki Asakura
2. 発表標題 Current State of Prognosis Telling and Their Responses in Cancer Patients at The End
3. 学会等名 Oncology Nursing Society 42nd Annual Congress (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小笠原知枝	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ヌーヴェルヒロカワ	5. 総ページ数 390
3. 書名 エンドオブライフケア看護学：基礎と実践	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	島内 節 (Shimanouchi Setu) (70124401)	人間環境大学・看護学研究科・教授 (33936)	
研究分担者	下舞 紀美代 (Shimomai Kimiyo) (80458116)	関西看護医療大学・看護学部・教授 (34531)	
研究分担者	原田 美穂子 (Harada Mihoko) (40537784)	関西看護医療大学・看護学部・准教授 (34531)	
研究分担者	小林 由里 (Kobayashi Yuri) (30826813)	奈良学園大学・保健医療学部・准教授 (34604)	
研究分担者	橋本 容子 (Hashimoto Yoko) (90789695)	福井大学・学術研究院医学系部門・助教 (13401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	加藤 亜妃子 (Katou Akiko)	人間環境大学・看護学部	
研究協力者	山本 純子 (Yamamoto Sumiko)	大手前大学・国際看護学部・教授	
研究協力者	江坂 美保 (Esaka Miho)		
研究協力者	小川 菜津子 (Ogawa Natuko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関